

松江電燈株式会社と大橋茂右衛門屋敷

はじめに一調査あるある

調査研究に関する「あるある」のひとつに、「探しものは探していない時に見つかる」というのがあります。「あの資料は絶対ここで見たはずだ」「あれに関する情報はここにありそう」と予測をたて精魂傾け探してみても、だいたいの場合、何時間たっても「あれ」は見つかりません。けれども、全く関係のない別の探しものをしている時、過去に探していた「あれ」はフッと出てくるのです。

「松江電燈本社」の図版

『松江市史』近現代編の編纂業務に携わっていた頃、執筆者の先生方からしばしば、図版用の写真の検索を依頼されました。松江の近現代史にとって重要な人物、団体、行事、建造物などが主ですが、すぐに見つかることは少なく、何日かけても無駄足ばかりで別の候補に変更、ということもよくありました。

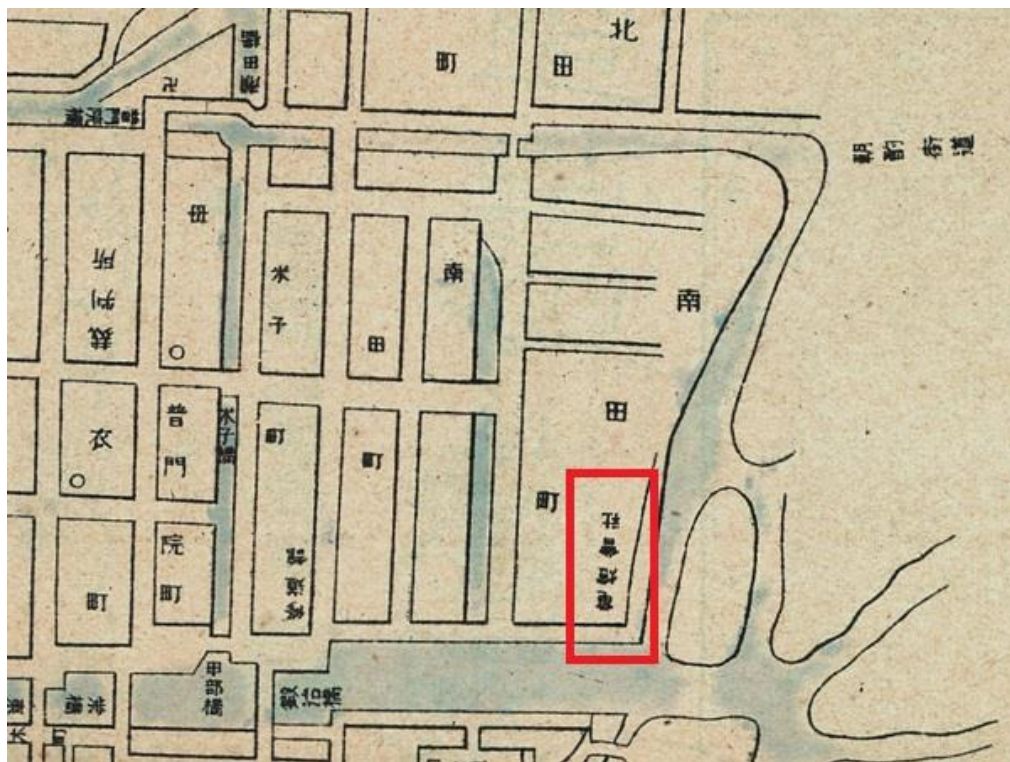
そうした検索対象のひとつに、「松江電燈株式会社」の写真がありました。「松江電燈株式会社」とは、明治 28 年（1895）に殿町の城山椿谷で操業を開始した地域初の電力会社です。現在、同地には「電気発祥之地」の文字を刻んだ記念碑が建てられています。同社はその後、大正 6 年（1917）に出雲電気株式会社（本社：簸川郡大津村）と合併して解散、昭和 17 年（1942）に中国配電株式会社に統合され、戦後、現在の中国電力株式会社となります。

電気事業は近代を代表する産業のひとつであり、しかも松江電燈の初代社長は肉筆浮世絵コレクターとして全国的にも著名な桑原羊次郎氏（号・双蛙、1868-1955）。同社の写真があれば当然、図版の有力候補でしたが、『松江市史』編纂当時は発見できずに終わりました。

ところが最近になって、出雲電気株式会社の資料を探していた際、たまたま開いた『中国地方電気事業史』（中国電力株式会社、昭和49年刊）という本に、「松江電燈本社」の図版が掲載されていたのです【図1-1】。虫眼鏡で拡大してみると、確かに玄関脇に「松江電燈株式会社」の看板がかかっています【図1-2】。元の写真の所在が知りたく発行元の中国電力に伺ってみました。残念ながら50年近く前の出版物のため不明とのことでした。



【図1-1】松江電燈本社（『中国地方電気事業史』中国電力株式会社、昭和49年刊、51頁）、【図1-2】同前、部分拡大図



左【図3】「松江市全図」明治39年、南田町に「電燈会社」（朱囲み部分）

右【図4】松江電燈株式会社の移転広告、『山陰新聞』明治34年3月20日掲載

すなわち、【図1】の図版左側に写っている大きな煙突のある建屋は同地に新設された南田発電所、前を流れているのは京橋川とされます。

同社が殿町から南田町に移転した理由としては、施設増設のほかにも

- 城山の樹木が枯れた原因が石炭火力発電の煤煙であると噂された
- 発電所の騒音に対する近隣からの苦情
- 将来の行幸を目指し、行在所となる興雲閣の建設が城山公園内で計画されていたこと

などが指摘されています。

しかし、煤煙・騒音への苦情から殿町を出て、移転した先が南田町…。これは現代の地理感覚でいくと、近すぎるのではないか、住宅密集地になぜ発電所？と言いたくなりますが、先ほどの【図2】【図3】明治後半～大正期の松江市街図を見ると、南田町の南と東は川に囲まれ、東側には何も無い、まさしく松江のはしっこだったのです。

大橋茂右衛門屋敷



さて、この移転先の「南田町 124 番地」、安部登先生著『松江の碑』によれば、「旧松江藩家老大橋茂右衛門屋敷跡」でした。江戸時代の城下絵図を見ると、南田町の半分以上を大橋家が占めています【図5】。現在の住宅に換算すれば70軒から80軒がすっぽり収まるくらい、家と言うよりは自治会レベルの広大な敷地でした。

【図5】松江城下絵図、天保年間（1830～1844）頃、松江歴史館蔵、南田町に大橋茂右衛門屋敷

よく知られているように、江戸時代後期、松江藩には家老職を世襲する「代々家老」と呼ばれる家が六家あり、大橋茂右衛門家はそのひとつ、もっとも石高の高い筆頭家老でした。特に、幕末の八代・大橋茂右衛門は、慶応4年（1868）の山陰道鎮撫使事件に際して自らの切腹をもって難を乗り切ろうとした人物として知られ、藩内で高く評価されました。その勲功により十代藩主・松平定安の次男・安敦を養子に迎え、安敦は同家九代となりましたが、明治22年（1889）に早世しています。

それ以降の大橋家の動静は明らかではありません。しかし、少なくとも松江電燈株式会社が「南田町124番地」に移転した際、【図1】の社屋となったのは、そこにあった大橋茂右衛門屋敷の一部であったと考えられます。

むすびに

近代産業の代表格ともいえる電気事業が、明治34年（1901）から大正2年（1913）にかけての一時期であったにせよ、藩政時代を代表する家老屋敷で運営されていたというのは、何とも不思議に感じます。思いがけず見つかった「松江電燈本社」の図版ですが、「近代」というものはある日突然まっさらな場所に登場してくるのではなく、それ以前の歴史の積み重ねの上に成り立っているのだな、とあらためて感じた一件でした。

（松江市歴史まちづくり部史料調査課／村角紀子／令和3年5月21日記）

参考文献：

- 中国地方電気事業史編集委員会 1974『中国地方電気事業史』中国電力株式会社
- 石塚尊俊 1993『出雲市大津町史』大津町史刊行委員会
- 玉木勲 2011『松江藩を支えた代々家老六家』ハーベスト出版
- 松江市史編集委員会 2014『松江市史』史料編11「絵図・地図」松江市
- 安部登 2015『松江市ふるさと文庫17：松江の碑-碑が語る松江の歴史-』松江市
- 澤田順宏・三瓶良和・新宮敦弘・岡崎雄二郎 2021「史跡松江城内にあった炭鉱と火力発電所」『松江城研究』3号